
シュンペーター伝

革新による経済発展の預言者の生涯

トーマス K. マクロウ 著

八木紀一郎 監訳

田村勝省 訳

PROPHET OF INNOVATION: Joseph Schumpeter and
Creative Destruction by Thomas K. McCraw
Copyright ©2007 by the President and Fellows of Harvard College
Japanese translation published by arrangement with
Harvard University Press through The English Agency
(Japan) Ltd.

スーザンへ、愛を込めて

序

この伝記には主役が二人いる。一人はヨーゼフ・アロイス・シュンペーター（一八八三—一九五〇年）、そしてもう一人は資本主義的な革新という現象である。シュンペーターはこれまでに生存したなかでも偉大な経済学者の一人であり、しかも強烈な個性をもっていた。資本主義の研究に彼は取り憑かれていた。彼の洞察は、戦時下における自分自身の荒々しい体験、激動する経済、個人的な不運によって形成された。

シュンペーターの業績の影響は計り知れないものであり、資本主義に関する現在のとらえ方は彼の考え方に負うところが大きい。特に彼は革新、企業家精神、ビジネス戦略、「創造的破壊」などを強調した。企業の分析を専門とする人々はこのうち最初の二つに共鳴している。シュンペーターは第三の用語を広めるのを助け、第四の用語は自分で考案した。シュンペーターと資本主義の関係はフロイトと心の関係に似ている。彼の考えは非常に一般化して深く浸

透しているため、我々は彼の根本的な思索と我々自身の思索とを区別することができない。筆者が本書で意図したのは、シュンペーターの人生と業績をたどることである。それによってシュンペーター自身と彼の影響力を深く理解することが可能になるだろう。

シュンペーター自身は数字に魅惑されていたが、本書は数字が多用されているような本ではない。しかし、シュンペーターにお目にかかる前に、彼の研究テーマである資本主義に関する統計数字を、彼が喜ぶような形でざっと概観しておこう。⁽¹⁾

現在の平均的なアメリカ人の現金収入は一八〇〇年と比べて二〇倍以上になっている。もしあなたがアメリカ人であれば、現在の所得の二〇分の一で暮らすことを想像していただきたい。生活スタイルの多くの部分は現在とは異なったものとなり、一八〇〇年当時のほとんどの祖先と同じように、おそらく自分の食物は自分で栽培しなければならぬだろう。

二一世紀の現在、世界人口の約八〇％は依然として極めて貧しい。富裕国のほとんどの人はこのことを知っている

が、大部分が貧困層であるという陰惨な現実、なかでも極貧層の困窮を想像することは困難である。アメリカ人が一日約一〇〇ドルで生活しているのに対して、世界人口のおよそ半数は一日二ドル未満で生き延びようと苦闘している。最富裕二〇カ国の一人当たり所得は最貧二〇カ国の三七倍に達している。中国やインドの一部地域における大きな前進にもかかわらず、ほとんどの諸国は資本主義を人々のために機能させることにいまだ成功していないといえる。

しかし、なかには大きな成功を取めた国もあった。日本と西ドイツが第二次世界大戦の混沌からいかに速く回復したかを思い出そう。これは各地の企業家精神と国家の成長政策に牽引された革新の好例である。アメリカはこれを支援した。ソ連と対峙する冷戦下で、日独両国が強力な同盟国になることを望んでいた、というのがその理由である。

もう一つの例として、シュンペーターの生誕地である現在のチェコ共和国がある。ドイツとオーストリアに挟まれた国であり、彼はその独逸の両国にも渡米する前に住んでいたことがある。チェコには活発な工業化において長い歴史があった。しかし、ナチスやソ連が彼らの政治や経済の

システムを強制したために甚大な被害を受け、一九九〇年に民主主義が到来してからも後遺症が長く続いた。チェコの一人当たりの所得は一九九五年にはドイツやオーストリアのわずか半分にすぎなかった。ところが、二〇〇五年にはその三分の二にまで上昇している。

このような数字のほとんどは資本主義の「累積的な」力を反映したものである。超長期的（例えば一八世紀以前の千年間）にみると、西ヨーロッパの個人所得は六三〇年毎に二倍になっていた。しかし、近代的な資本主義が普及してからは、五〇一六〇年毎に倍増するようになった。アメリカでは四〇年毎に、日本は二五年毎に倍増した。日本は後発国だったため、ヨーロッパやアメリカの先例から教訓を学ぶことができた。カール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスでさえ『共産党宣言』のなかで、わずか一〇〇年間しか経っていない資本主義が「その前の世代すべてを合わせたよりも大規模で途方もない生産力を生み出した」ことを認めている。一八四八年に初めて『共産党宣言』が出版された時、シュンペーターの表現を借りると、「資本主義のエンジン」は暖まり始めたばかりだったのである。

資本主義という言葉を初めて使ったのはマルクスとその信奉者であったが、これは社会主義の反意語として発案された。しかし、その言葉の真意を教えてくれたのはシュンペーターである。⁽²⁾

本書はシュンペーターの狭い意味での経済思想を扱おうとするものではない。そうではなく、これは彼の波乱に満ちた人生と、資本主義を理解しようとする強迫的な衝動に関する本である。経済・社会・文化・政治的な要素の活発な関わり合い、質的に良い面と悪い面（両方とも強力である）、個人・家族・国家に対する影響などについて、彼は資本主義のことを考えないではいられなかったのである。

シュンペーターは、当時の知識人の間に存在した最も強い流れの一つに挑戦することによって、資本主義のベールに穴をあけた。その流れは我々の時代にもあてはまるものである。すなわち、狭い特化した方向へ向かう流れである。彼は経済理論だけに集中するのではなく、歴史、法律、文学、ビジネス、社会学、心理学、数学、そして政治学などの分野にも深く入り込んだ。資本主義が経済システム以上のものであるため、彼自身も経済学者以上

の人になった。彼と同時代のある人が述べたように、シュンペーターは「おそらく最後の偉大な博識家」であった。⁽³⁾彼の途切れない知的なオデッセイ「訳注…冒険旅行」のなかで微妙な変化が三回生じており、本書の三部構成はそのような知的な変化に対応している。第一に、彼は資本主義の経済学に焦点を絞った。第二に、資本主義の社会構造に焦点を絞った。そして第三に、彼が最も満足したことであるが、資本主義の歴史的な記録に集中した。これほど広い範囲における数多くの謎を解くことに彼が感じた喜びには、ほとんど狂喜に近いものがあつた。以下でその理由をお伝えできるよう努力してみたい。

革新なくして、企業家なし。企業家精神にあふれた業績なくして、資本家の利益も資本主義の推進力もない。産業革命の、あるいは「前進」の社会的環境においてのみ、資本主義は生き残ることができるのである。

ヨゼフ・シュンペーター『景気循環論』（一九三九年）

— 目次 —

序

iii

第I部 恐るべき子供（一八八三—一九二六）…革新と経済学

I

プロローグ シュンペーターとその業績	2
第一章 故郷を離れる	II
第二章 性格の形成	27
第三章 経済学を学ぶ	45
第四章 徘徊	67
第五章 出世への歩み	79
第六章 戦争と政治	99
第七章 グラン・リフィウト	123
第八章 アニー	133
第九章 悲嘆	149

第Ⅱ部 成人期（一九二六―一九三九）…資本主義と社会

プロローグ シュンペーターは何を学んだか？	168
第十章 知性の新たな目標	175
第十一章 政策と企業家精神	193
第十二章 ボン大学とハーバード大学の往来	213
第十三章 ハーバード大学	239
第十四章 苦悩と慰め	259

第Ⅲ部 賢人（一九三九―一九五〇）…革新、資本主義、歴史

プロローグ どのように、なぜ歴史と取り組んだのか	288
第十五章 景気循環、企業史	293
第十六章 ヨーロッパからの手紙	327
第十七章 ハーバード大学を去る？	357
第十八章 不本意ながら	369
第十九章 エリザベスの勇氣ある信念	385
第二十章 疎外	399

			第二十一章 資本主義・社会主義・民主主義	412
			第二十二章 戦争と困惑	445
			第二十三章 内省	473
			第二十四章 名誉と危機	485
			第二十五章 混合経済に向けて	501
			第二十六章 経済分析の歴史	525
			第二十七章 不確定性の原則	559
			第二十八章 結びの句	577
			エピソード 遺産	591
			監訳者あとがき	605
		写真出所		
	注			
索引				
	1	35	170	

第I部

アンファン テリブル

恐るべき子供 (1883-1926) :

革新と経済学

—プロローグ—

シュンペーターとその業績

この世の中で安定しているものなど何一つない。喧騒が唯一の音楽である。

ジョン・キーツの兄弟に宛てた手紙（二一八年）

シュンペーターが創造的破壊という言葉を初めて使ったのは一九四二年である。それは革新的な資本家の製品や方法がどのような古いものに継続的に取って代わっていくかを説明するためであった。彼はたくさんの事例を指摘している。工場が鍛冶屋を一掃した、自動車が馬や馬車に取って代わった、会社が自営業者をなぎ倒した、などである。彼はこう書いている。「創造的破壊は資本主義にとって本質的な事実である。安定した資本主義というのは言葉の矛盾といえる」⁽¹⁾。

創造的破壊という概念は二つのぶつかり合う概念を表している。多くの逆説を体現した私生活を送った人として

は、このことは驚くに当たらない。シュンペーターはF・スコット・フィッツジェラルドが言う一流の知性の縮図であった。すなわち、「精神に二つの相対立する概念を同時に持つ能力を有していながらも機能する」能力を保持していた。シュンペーターの生まれたオーストリアは、彼の子供時代には「テクノ・ロマンチックな」文明といわれており、この形容詞は同国と同じように彼自身にもうまく当てはまる。⁽²⁾

イギリスのある批評家がシュンペーターのことを次のように評したことがある。「彼は派手な性格の人で、その一代記はテレビの小規模な連続番組用に特に書き下ろしたかのようなであった」。中流階級の出身であるシュンペーターは、独力で高い地位を獲得したにもかかわらず、貴族の役割を演じるのが好きだった。勉強の面で神童振りを発揮したのを手始めに、二〇歳代に書いた本で年長者を驚かした。三〇歳代になると、短期間ではあったがオーストリアの財務大臣という公職についた。次に銀行家に転身して一財産を築いたものの、それを株式の暴落でたちまち失った。学問の世界に戻ってからは、アメリカに移住してハーバード

大学の教授になった。この頃までにシュンペーターは世界的に有名になっていたが、相変わらず文無しであった。大西洋横断の船賃を稼ぐためには、有償の講演会を引き受けなければならなかった。⁽³⁾

このような冒険の間に、彼は弱い人間なら間違いなく破滅してしまうような大きな不幸に見舞われた。しかし、ボクシングの乱暴な言葉を使えば、彼はパンチを受け止めることができた。困難にもかかわらず、公の場では常に大陸の「享樂家」、古い映画でケーリー・グラントが演じる魅惑的な放埒者のように振舞った。グラントは自分自身を完全に作り変えたことに思いを巡らせて、かつてこう言っていたことがある。「私はなりたいたいと思っていた人の振りをしていると、ついにはその人物になり切ることができた。あるいはその人が私になったというべきであろう」。

シュンペーターも同じであった。彼の会話は機知にあふれていた。突き出たあごが元気に動き、オリブ色の肌をした顔がたちまち様々な表情を作り出す。生き生きとした茶色の目が聞き手の関心をとらえて離さなかった。彼は自分を茶化しながら優秀さをひけらかすことも嫌いではな

かった。若い頃の絶頂期に、「田舎ではある程度の人気と名声を獲得したが、それは歳月の流れでゼロという妥当な水準に減少していくのは間違いない」と述べている。彼は高価なテイラーメイドの服を着ていたが、「着るのに一時間かかった」と告白している。数知れない女性がシュンペーターを愛し、彼もそれに応えた。「そのとおり、自分には女性に好かれる才能がある」と日記に書いている。彼は勇敢であることを思慮分別の良い面だと考えて、自分は世界一偉大な経済学者、騎手、愛人になる野心を抱いていた、と言うのが好きだった。そしてそれには、「馬はウマくいかなかった」⁽⁴⁾という「おち」がついていた。

しかしシュンペーターは、仕事に関して軽率だったことは一度もない。天才にはありがちなことだが、彼は仕事に取りつかれるようになった。彼はベンジャミン・フランクリンのように、毎日そして週毎に達成度について点数をつけた。失敗は〇点で、知性的に良い「成績」と自分で呼んだものは一点満点というのが彼のやり方だった。彼は自分に厳しく、数日間連続で夜更けまで仕事をして〇点をつけた。〇・五点はしばしばで、〇・六六(2/3)点も時々

あつたが、一点満点をつけることは稀であつた。

外向的なほとぼりの背後に、シュンペーターは情熱的で暗い、時には非常に陰鬱で感情的な側面を隠していた。生涯を通じて己と激烈な格闘試合を戦い続けていたのである。単に二つだけでなく、同時に数個もの相矛盾する考えが戦つていた。例えば彼の考えでは、マルクスは多くの問題についてはまったく正しいが、頑固なイデオロギー、あるいはシュンペーターの呼び方では「ビジョン」のゆえに、他の問題については間違つてゐる。同時代のケインズに関しても同じような判断を下していた。シュンペーター自身は、価値観に対して中立的な社会科学者になつて、明晰でイデオロギーの色に染まつていない仕事をすることを熱望していた。自分であれば、マルクスやケインズが陥つた罠を回避できると考えていたのである。

しかし、シュンペーターにも彼独自のビジョンがあつたことが判明する。彼の分析面における深い緊張関係は、一方における決定論と他方における偶然性の間に存在した。この緊張関係は生涯にわたつて仕事につきまとい、六〇歳代になるまで解決しなかつた。その間、様々な経済システ

ムを研究すればするほど、生産性と成長の観点で資本主義が独特の優位性をもつてゐる、という確信をいよいよ強めることになつた。

シュンペーターは彼が言うところの「精密経済学」、つまり決定的な予測力をもつ物理学のような精密な科学の構築を夢見ていた。余分なものがない抽象的な理論の数学モデルと、歴史のおよび社会的な証拠にかかわる完全な記録を調整できるといふ自信が彼にはあつた。しかし、技術的な精密さに対する彼の衝動は基本的にはロマンチックな使命感にすぎず、シュンペーターであろうと、だれか他の人であろうと、大きな規模ではこのことを達成するのは不可能である。そうではあつても、価値観の中立性、科学的な精密性、歴史的な経験に対する忠誠などの問題を解決するための苦闘は、資本主義に関する彼の分析に大きな報酬をもたらし⁽⁵⁾た。

資本主義にかかわる疑問（それが何であり、どのようにしてうまく機能するのか、うまく機能するところと、そうではないところがあるのはなぜかなど）は、人々や政府が直面している疑問のなかでも最も重要である。これは約

三〇〇年にもわたってそうであつたし、近い過去と現在においてはまさに重要である。二〇世紀最後の二〇年から二一世紀最初の二〇年に至る期間を回想してみよう。七〇年間にもわたって資本主義に対して真剣な挑戦を続けてきた共産主義が突如として崩壊した。一九九〇年代には企業家が一般大衆の英雄になるという浮かれ騒ぎの繁栄があつた。それに引き続いて企業の不正事件という病が発生して広まつた。株主や従業員は破産し、資本主義自体も名を汚された。さらに、国際的なテロリズムという罰が当たり、果てしない戦争の前兆になつた。そして最後に、世界各地で目覚ましい経済的利益が発生した。新しい資本主義的な経済システムと古い共産主義的な政治システムを組み合わせた中国では特にその傾向が顕著である。

このような問題はどのように理解したらいいのだろうか？ 資本主義はなぜ七〇年間にわたる闘争を経て共産主義に勝利したのだろうか？ 役員報酬制度は法外であり、相次ぐ不正会計は資本主義の腐敗なのだろうか、それとも当然のことなのだろうか？ テロリストに関して「なぜ奴らは我々をそれほど嫌うのだろうか？」と人々は疑問

に思っているが、その「我々」の定義に資本主義はどのような役割を果たしているのだろうか？ 中国を初めとする諸国は国民により多くの政治的自由を付与することなしに、いつまでも経済的な発展を維持することができるだろうか？

この種の疑問に対する最も明解な回答のうちのいくつかはシュンペーターから得られる。彼は革新、人間ドラマ、大損害、それら全てが一度に生じている表現として資本主義をとらえていた。彼は資本主義のことをほとんどの人々が経験している姿のままに語つた。際限のない広告で喚起された消費者の欲求として、社会的な序列の強制的な上下変動として、達成し、破壊し、修正し、そして人々が何度も挑戦して再び達成する目標として、資本主義をとらえていた。資本主義にとつて、またシュンペーター個人にとつて、安定的なものは何もなかった。喧騒がその唯一の音楽であつた。

資本主義について深く考えたことのあるほとんどの人と同じく、シュンペーターは複雑な気持ちになつた。彼は自分のことを保守的な人間だと考えており、保守主義の意味

に關する本を執筆する計畫さえ立てていた。しかし仲間の經濟學者ジョン・ケネス・ガルブレイスに、次のように語っている。「これまでに出会ったことのある保守主義者で、私がこれから描こうとする絵の中に自らを見出すような人は一人もいないだろう。このことについては相當な自信がある」。シュンペーターは、企業文化の一部にみられる凡庸さを毛嫌いし、旧世界の芸術的な達成度を崇拜していた。創造的破壊というのは經濟成長を育むが、大切な人間の価値を低下させる、ということを彼はわかっていたのである。彼のみるところでは、貧困は悲嘆をもたらすが、繁栄も心の平安を必ずしも保証するものではない。⁽⁶⁾

どんな社会にとつても、生活水準の急上昇は至高の価値をもつ報奨のように思える。にもかかわらず、資本主義というのは富裕層を利用するために貧困層を収奪するという点で実にひどい評判を得ていることで有名であり、報奨について人々が公正な配分とみなせるような状態を達成したことはない。一部の諸国では、資本主義は抵抗し克服すべき呪いであるとされている。富裕諸国の幸運な受益者でさえ、資本主義は追求するに値しない、受容されるべきではあつ

ても祝うべきものではない、という罪の意識を抱いている。シュンペーター自身も「株式取引所は聖杯の代用品にはならない」と述べている。⁽⁷⁾

シュンペーターは他の専門家だけでなく、時には専門家でない人々のためにも、資本主義の革新に関する分析と説明に膨大なエネルギーを注いでいる。彼の人生と業績に關する物語に引き込まれながら、読者は柵一杯の教科書から得られるのと同様の、資本主義の原動力の基本的な構造を把握することができるだろう。この主題は極めて重大であり、その社会的な構造全体は非常に入り組んでいる。しかし、「經濟的な」本質はさほど複雑ではない。シュンペーター自身は、一九四六年に『大英百科事典』用に書いた資本主義に關する長い項目の冒頭で、次のように述べている。「ある社会は、經濟的な過程を民間の企業人の指図に任せなければ資本主義と呼ぶことができる。これは次のことを意味するといえる。第一に非人格的な生産手段の私的所有……、第二に私的な計算による生産、すなわち私利のための私的な動機付けによる生産」。さらに、第三の要素が「資本主義システムの機能にとつてあまりに本質的である」

ため、他の二つの要素に追加されなければならない、と付言している。⁽⁸⁾

その第三の要素とは信用の創造である。資本主義の核になつてゐる気風は常に先を見て、新しい事業を打ち出すために信用に依存する。ラテン語の語源である「クレド」——「私は信じる」の意——によれば、信用というのはより良い未来に対する賭けを意味する。このような賭けをする企業家や消費者は、往々にして過去をほとんど気にせず、現在についても辛抱したりしない。現在手元にあるものを大幅に上回る資源を必要とする革新的なプロジェクトを實行したり、高価な買い物（例えば家）をしたりする。信用がなければ、消費者も企業家もともに果てしない欲求不満に陥るだろう。

かつてシュンペーターは、企業家とは「すべてのことがそれを中心に回転している枢軸である」と述べている。企業家は大企業か小企業か、あるいは古い企業か新規設立企業かは問わず、革新と創造的破壊の執行者である。彼らのプロジェクトが新規の雇用、所得の増大、一般的な経済進歩の源泉となる。しかし、台頭する企業家は創造的なエネ

ルギーを解放する過程で、古い企業家を押しつけ、彼らの夢だけでなく、時には財産をも破壊する。富裕国においてさえ、大多数の人々は決して企業家にはならないだろう。成功している企業に就職さえできない人もなかにはいる。そしてほとんどの企業は遅かれ早かれ失敗して、時には個々人は言うに及ばず、地域社会全体に被害をもたらすこともある。⁽⁹⁾

資本主義は最悪の場合、すべての人間関係を個人的な損得という粗野な計算に還元してしまう。物質的な価値を精神的な価値の上に置き、環境を荒廃させ、人間性の最も醜い面を搾取する。すべてが売り物になる環境の下では、企業はあらゆることで利益を上げることができる。怠惰は例外になる可能性もあるが、七つの大罪（傲慢、強欲、肉欲、怒り、大食、妬み、怠惰）も含まれるだろう。シュンペーターは日記にこう書いている。「私はときどき不思議に思うことがある。これまでに、誰かにとつての営利事業でないような大儀をかかげた事業が起業され、成功したためしがあるだろうか」⁽¹⁰⁾。

しかし、もし何らかの方法で資本主義が高貴な人道的目

的との間で両立が可能なのであれば、それはウインストン・チャーチルの民主主義に関する有名な定義の経済的な等価物になる——「それ以外のすべてのシステムを除いて、あり得る限り最悪のシステム」。その欠陥にもかかわらず、資本主義だけが、孤独で、貧しく、汚らわしく、残虐で、短いというホッブズ的な生活の自然状態から人類を引き上げるのに必要な、科学的、技術的、医学的な革新を育んできたのである。

何百人もの一流の思想家がこのような問題に取り組んできている。アダム・スミスとカール・マルクスという偉大な二人はまったく正反対の結論に到達した。スミス（一七三三—一七九〇年）が市場経済を理想的なシステムに近いと考えたのに対して、マルクス（一八一八—一八八三年）はそれを社会主義に至る不可避的な途上における不愉快な期間として糾弾した。生まれたのが遅く、二〇世紀になって成熟した資本主義を研究できたシュンペーターは、より有名な両先駆者を分析的な精緻さという面で凌駕することができた。⁽¹¹⁾

彼の生涯に起きた様々な事件が示しているのは、資本主

義は多種多様な状況下で実に様々な形態を取り得る、ということである。彼はかつて「資本主義社会という無際限に複雑な有機体」と評したことがある。経済的なシステムであると同時に社会的および文化的なシステムでもある資本主義は、良い目的であろうと悪い目的であろうと、いずれのためにも機能することができる。道德的、不道德的、あるいは——最も起こりやすい——道德を超越したものにもなり得る。すべてはその時の時代背景に依存しており、とりわけ集団や国家が破壊的な副作用を緩和しながら、創造的な要因をどの程度最大化できるかに依存している。⁽¹²⁾

シュンペーターと同世代の人々の多くは、資本主義に関してあまりにも樂觀的な見方を抱いて育った。民主主義と技術が永続的な平和と繁栄をもたらすという一九世紀の信念に染まっていたのに、二〇世紀になると、戦争、恐慌、全体主義、虐殺などまったく異なるものを目にした。第一次世界大戦の殺戮は樂觀論を抹殺した。一九三〇年代の大恐慌は民主主義と資本主義の両方に対する信念を揺るがした。多くの人々にとって、大恐慌と第二次世界大戦の開始は市場の失敗と社会主義の優越性を確認するものとなった。

しかし、シュンペーターにとってはそうではなかった。彼は平時でも戦時下でも、経済システムと政治イデオロギーが優越性をめぐって死闘を演じるのを目の当たりにしてきた。そして家族や地域社会が富と貧困の間を行き来するのを見てきた。彼は資本主義に対して幻想を抱いていなかったばかりか、己の判断にも疑いをもっていなかった。すなわち、その経済的な豊かさは平均的な人の人生を大幅に向上させて、その否定的な効果を十二分に相殺したということだ。個人企業家の倒産や職人二、三千人の陳腐化は、新しい安価な物を手に入れるようになった何百万という人々のより大きな自由や安楽と比較すれば、どうということはないのである。⁽¹³⁾

大恐慌直後で反資本主義の雰囲気が高潮に達していた時、シュンペーターは以下のように書いている。「資本主義生産の典型的な功績は、安い布、安い綿やレーヨンの生地、ブーツ、自動車などであって、富裕層からすれば総じてたいして意味のない改善にすぎない。エリザベス女王は（二六世紀に）絹製のストッキングを所有していた。資本主義の功績は典型的には女王のためにより多くのストッキ

ングを供給することではなく、それを女工たちの手もとに、削減する仕事量の見返りとしてもつてくることにある。これが資本主義の過程である。それは偶然ではなく、それがもっている構造のおかげであり、大衆の生活水準を次第に引き上げていくことになる。⁽¹⁴⁾

しかし、資本主義というのは人間生存の自然な状態ではない。もしそうであれば、歴史上もつと早く出現して、今や至る所に広がっているはずであろう。そうではなく、構築し、維持することが並外れてむずかしいシステムなのである。スミスの言う「見えざる手」がやはり必要不可欠であるが、もはや十分ではない。スミスがあればと称賛した一八世紀の水車がもはや十分ではないのと同じである。「現代」資本主義は洗練された知識と決意をもって、能動的に養成されコントロールされなければならぬ。企業家による恒常的な推進と規制当局による注意深い監視がなければ（後者の必要性をシュンペーター自身を含め自由市場の多くの唱道者は大幅に過小評価している）、その潜在力を完全に達成あるいは維持することはできない。創造的破壊のなかで非常に大きな存在になっ

た現実のエンジン（蒸気、電気、ディーゼル、ガソリン、ジェット）と同じように、資本主義のエンジンは減速し、動きが不安定になり、オーバーヒートし、あるいは停止してしまうことがあり得る。

シュンペーターは、資本主義がどのように機能するかを人々が理解して、初めてその利益のすべてを享受できると信じていた。それが資本主義の像を描き出し、それを説明するのに、彼があれほどの時間を費やした一つの理由である。資本主義のエンジンは十分理解された場合にのみ、猛然と唸りを上げて人類に驚異をもたらすのである。